

きじむんの どう〜ちゅいむにい〜 第12回

法文学部・観光産業科学部前 日時計

ハイサーイ！ キジムンヤイビーン。

今回は法文学部・観光産業科学部前にある日時計を案内します。

法文学部・観光産業科学部正面玄関前の芝生に日時計が設置されています。この日時計は、1996(平成8)年3月に短期大学閉学を記念して設置されました。日時計本体の円盤は真鍮製の直径100cm、台座は久米島産の安山岩が使用されていて、高さ73cm、縦横約150cmです。



日時計正面



円盤

台座部正面には「向学ノモン」と、古代ギリシャ哲学者ヘラクレイトスの言葉「太陽は日々新しい」が刻まれています。日時計の影を落とす部分を gnomon (ノモン) といい、古代ギリシャ語では指針という意味。「向学ノモン」は「学ぶ者の指針」という意味になります。また、円盤には世界の主要都市の方角が刻まれています。琉大キャンパスから真理と正義と平和を愛する青年達が世界へ羽ばたいていくようにと願いをこめてこの日時計を建てた、と台座部東側に張りつけてあるプレートに記されています。よく見るとノモンの部分が鳥になっていますよ。



漏刻門日影台方位盤の破片【琉球大学資料館所蔵】

日時計に関連して、ここで少し琉球の時計の歴史を紹介します。琉球王国時代は主に首里城内の漏刻門に設置された水時計(漏刻)で時刻を計り、その補助として日時計や砂時計も併用していました。当時の水時計は不正確であったため、尚敬27(1739)年に蔡温が日時計の正確な測定法の発明改正を行いました。蔡温は刻時森(ククジムイ)と呼ばれる小高い丘(現在の西原町字幸地、アドベンチストメディカルセンター後方)に日時計を設置し、役人をおいて時刻を観察させてデータをとりました。尚敬32(1744)年以後はそのデータをもとに改正した測定法で時報を行ったとされています。琉球大学資料館(風樹館)には首里城で使われていた日時計の破片が残されています。現存するのは本資料のみで、現在首里城にある日時計の復元の基礎資料となりました。



今年度のどう〜ちゅいむにい〜は今回で終わりです。全12回、琉球大学内外にある史跡や遺物を紹介しましたが、いくつ知っていましたか？知らなかった場所があったら、琉大内外の史跡・遺物マップと冊子を現在作成中なので、ぜひそれを片手に足を運んでみてくださいね。(沖縄資料担当：H)

参考文献：琉球大学開学50周年記念史編集専門委員会編『琉球大学五十年史』(琉球大学、2000)
西原市史編集委員会編『西原市史第五巻資料編四』(西原町役場、1996)
那覇市企画部文化振興課編『那覇市史通史第1巻』(那覇市役所、1985)